「今」を生きる私達の命を守るために

北杜市立甲陵中学校　三年　酒井志帆（さかいしほ）

年間約一〇〇〇件。

これは日本における、土石流や崖崩れなどの土砂災害の発生件数の平均である。私はこの数字に唖然とした。一日に約二・七回も土砂災害が発生しているなんて。もしかして、私が暮らす山梨でも大きな土砂災害が発生したのではないか。そう思い調べてみると、明治四〇年と昭和三四年に、県全域が大きな水害に見舞われたことを知り、驚いた。

明治四〇年の水害では、台風によって日川などの流域で洪水が発生し、死者二二三人、全半壊・浸水家屋二六六七七戸という甚大な被害が出ていた。想像以上の犠牲者の数に、私は目眩がした。堤防が決壊して川が氾濫し、民家は次々と濁流に呑まれていったそうだ。

昭和三四年の台風による水害も、県全体で死者・行方不明者二六四人、全半壊・浸水家屋一二八八五戸と凄まじい数の被災者が出た。

災害に巻き込まれた人々は押し寄せてくる濁流に、何を思ったのだろう。

この水害で生き残った人々の体験談に私は、鳥肌が立った。

屏風のように立ちはだかる真っ黒な土石流。振り向くと迫り来る、山のような高さの黒褐色の水。りから聞こえる、「ゴットン、ゴットン」という、腹まで痺れるような不気味な音……。土石流を目の当たりにした人の話は、想像の何十倍も鬼気迫るものだった。水害の恐怖を伝えるのにそれ以上説得力があるものはないだろう。もし、濁流に呑まれたのが私だったら。私の家族だったら。あまりの恐ろしさに言葉も出なかった。

そして、特に私の心を揺さぶった体験談があった。

Aさんは土石流発生の直前、近所の女性と話していた。女性は、「流されたりしないだろうし、私は二階へ逃げる」と言っていた。だが、その女性は息子さんと、家と一緒に流

されてしまった。

避難の途中、Bさんは膝の高さまで水につかり、動けなくなった老夫婦をロープで助けようとした。だが、目の前の家が倒れてきて、二人はその下敷きになってしまった。

洪水の危険が迫る中、荷物を運び出そうとする人達に、Cさんは早く逃げるように言った。だが、濁流に巻き込まれてその人達はそれくなってしまった。

どれもこれも、無慈悲に襲いかかる濁流に恐ろしさと怒りを感じた。だが、同時にこれらの証言から三つのことを学ぶことができた。

一つ目は、自分の家ではなく避難所に逃げることの大切さだ。自分の家は確かに安心感があるが、そこが本当に安全とはいわない。そして命を守る避難所も、「自分には関係がない」と思っていると、全く無意味なものになってしまう。普段から災害を「自分のこと」として関心を持ち、家族で避難所の場所を確認しておく必要がある。

二つ目は災害発生時に必要とされる、「共助」の難しさだ。老夫婦を助けようとした8さん自身の命は危機一髪だった。災害時に共に助け合うことは大切だが、誰かを助けることには危険が伴うものだ。しかし、「水だー、逃げろー」という声で助かった、という体験談もあった。自分の身の安全も確保しつつ、状況に合った最善の行動をとるべきだ。

三つ目は、「すぐ」逃げることの重要性だ。危険がそこまで迫ってから逃げても意味がない。「いつ避難するか」の判断が生死を分ける。だが、周りで誰も避難していなかったら、避難することができるだろうか？

というのも、祖父母に「大雨による土砂災害の危険が迫ったらどうするのか」と尋ねたときに、「すぐに避難しようとは思わない」と答えられたからだ。祖父母は、土石流の土砂災害警戒区域に住んでいるので、私は心配になった。なぜすぐに避難しないのか問うと、祖母は困ったように、「避難所までの距離が

遠いし、そこに行くまでが怖いからね。」途中に吊り橋まであるから……」と語尾を濁した。

私は、「それでもすぐに避難しないと」と言うのに躊躇ってしまった。避難所に行くまでに何かあったらどうしよう、と。しかし、土石流が流れ込んできてからでは遅い。その逡巡こそが命取りなのだ。家は遠く離れていてすぐには会いに行けないが、雨が多く降ったときには祖父母に電話をかけ、少しでも避難の後押しをしたいと思った。

「天災は忘れた頃にやってくる」

私たちは忘れているのではないか。自分たちが住む地域にどんな災害が起き、どれほど人々がいえぐられるような体験をしたのかを。この恐ろしさを後世に伝え、多くの人がその体験から学ぶべきだ。また、今では土砂災害警戒警報やハザードマップなど、昔と違って命を守る方法がたくさんある。「今」を生きている私たちだからこそ、普段から身を守るためにできることを、実行していきたい。